

**おおはし里の杜に対する
JHEP 認証[第 2 回更新]
審査レポート（概要版）**

2026 年 9 月

おおはし里の杜に対する JHEP 認証 [第 2 回更新] 審査レポート (概要版)

評価申請者

名称 首都高速道路株式会社 (代表取締役社長 青木 由行)

住所 東京都千代田区霞が関 1-4-1

申請番号

1-4255001-1601

評価実施者

名称 公益財団法人日本生態系協会 (会長 池谷 奉文)

住所 東京都豊島区西池袋 2-30-20 音羽ビル

ハビタット評価認証制度 JHEP

JHEP（ジェイヘップ）は、米国連邦政府が開発した HEP という環境評価手法を、当協会が日本で適用可能な形に改良し、2008 年に創設したもので、事業を実施する前よりも生物の多様性の価値が向上した取り組みを、定量的に評価、認証する日本唯一の認証制度です。

自然の生態系は現代世代及び将来世代のもっとも大切な生存基盤です。その生態系の構成要素である生物の多様性は、私たちにとって遺伝子資源としても、なくてはならない基本財産です。その生物の多様性の価値がこれまで、漠然としたイメージで取り扱われてきました。

JHEP により、「動物のすみやすさ（HSI）」、「植生の地域らしさ（VEI）」という 2 つの指標を用いて数値化し、事業の前後を比較することで、生物の多様性の保全や再生の効果を明確に示すことが可能となりました。本認証は世界レベルの厳しい基準によるもので、消極的な環境への“配慮”では取得困難です。それだけに、認証を取得した取り組みは、社会に大きく貢献すると共に、世界へ発信可能な事業であると言えます。

目次

I. 評価の概要	1
II. 評価区域と基準年.....	3
1. 評価区域	3
2. 基準年	4
III. 事業内容	5
1. 事業の概要	5
2. 緑地割合	11
IV. 評価結果	12
1. 保全再生目標等の設定.....	12
2. 植栽植物等の確認（要件 3 の確認）	20
3. 評価基準値の算出.....	21
4. 事業によるハビタット得点の算出.....	26
5. 更新年の 50 年後におけるハビタット得点（要件 2 の確認）	31
6. 評価値（要件 4 の確認）	32
V. 審査結果	36

I. 評価の概要

申請番号 1-4255001-1601

評価対象事業

名称 おおはし里の杜
 所在地 東京都目黒区大橋一丁目 9 番 1 号
 評価面積 1,176 m²
 緑地面積 908 m²
 概要 屋上の緑地造成、維持管理

事業実施者

名称 首都高速道路株式会社（代表取締役社長 青木 由行）
 住所 東京都千代田区霞が関 1-4-1
 問合窓口 CS・サステナビリティ推進部 サステナビリティ推進室
 脱炭素社会推進課
 電話番号 03-3539-9359

認証タイプ ハビタット評価認証 ver.3.0（JHEP ver.3.0）
 基準年 2000 年
 申請年 2016 年
 更新年 2026 年
 緑化条件 総敷地面積の 20%以上が緑地となる。
 将来における緑地割合 81.7%
 目標植生 シラカシ群集／チガヤーススキ群落／コナギ群落
 評価種 シジュウカラ／コムスジ／ショウリョウバッタ／アオモンイトトンボ

評価結果

要件 2 ハビタット得点が将来までに 8 点以上とすることが見込まれる。
 50 年後のハビタット得点 34.4 点（得点範囲：0～100 点）
 要件 3 生態系被害防止外来種を使用しない。
 使用なし

要件 4 評価対象事業で得られる、更新年から 50 年間における年平均ハビタット得点が、評価基準値以上となる。

年平均ハビタット得点の増減 +33.1 点 (得点範囲：-100～+100 点)

認証可否 認証可

保全タイプ ハビタット代償保全および向上

評価ランク AAA

総評

今回の更新認証に係る現地調査では、地域性に即した緑地および水辺環境が適切に維持・管理され、周辺緑地をつなぐエコロジカルネットワークの拠点として生物多様性に貢献する継続的な取り組みが確認され、認証基準を満たしていると認められました。

今後は、物理的制約や安全管理上必要な箇所を除き、今後も一律的な整枝・剪定を避け、自然な樹形を維持する育成管理の継続を推奨します。将来的に樹高・葉張りを大きく成長させることで、HSI のさらなる向上が期待できます。

多様な自然環境の再生と気候変動への対策が最大の課題となっている現在、本事業は当該地域の生態系ネットワークの拠点としてさらに重要性が増し、自然と共存する美しいまちづくりの先進事例となっています。AI の導入が進み、世界的に ESG 経営や SDGs、ネイチャーポジティブ実現に向けた取り組みが求められる時代において、企業の果たすべき役割が、今ほど注目されている時代はありません。国際化が進行する中、今後も取り組みが改善、拡大され、生物の多様性を重視した取り組みが継続、発展されていくことが期待されます。

ガイドライン

ハビタット評価認証制度 考え方と基準 ver.3.0

評価認証機関

公益財団法人日本生態系協会

電話番号 03-5951-0244

認証日 2016 年 9 月 21 日

更新日 2026 年 9 月 21 日

有効期限 2031 年 9 月 20 日

認証番号 1-4255001-1601/02

Ⅱ. 評価区域と基準年

1. 評価区域

評価区域は東京都目黒区大橋一丁目 9 番 1 号に位置し、評価区域の面積は 1,176 m²である（下図の赤色部）。

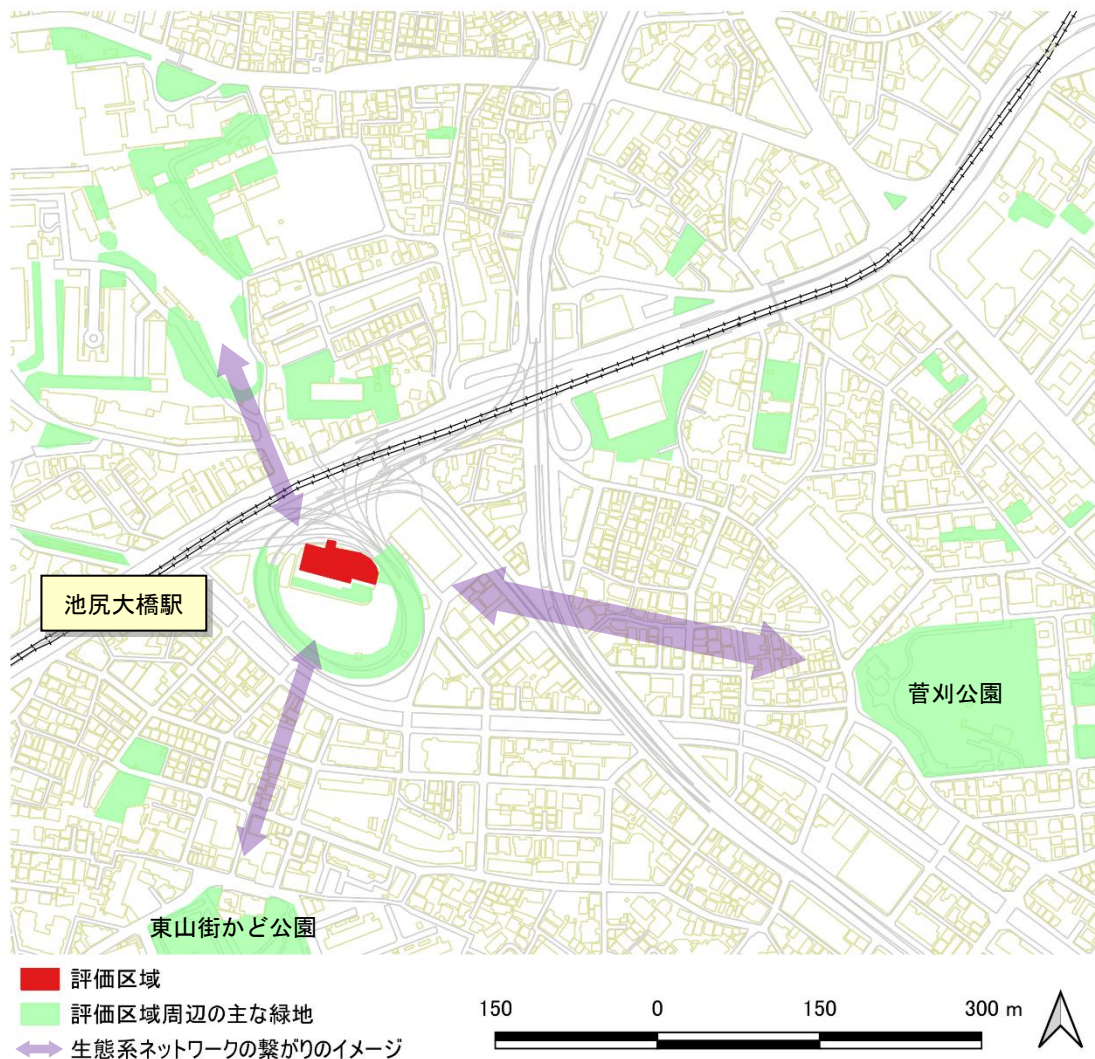


図. 評価区域

（国土地理院発行の基盤地図情報 25000 および国土数値情報をもとに作成）

2.基準年

基準年は、土地取得年である 2000 年とした。

Ⅲ. 事業内容

1. 事業の概要

対象地は東京都目黒区の北部、渋谷駅から西南西へ約 1500m の場所に位置する。対象地は、首都高速道路株式会社が 2000 年～2007 年にかけて段階的に土地を取得し建設した。その後 2010 年 12 月に「おおはし里の杜」の植栽工事を着工し、2011 年の 8 月に竣工した。対象地は大橋ジャンクション内の換気所屋上にあり、地上約 30m に位置する。

「おおはし里の杜」は人と自然とが共生していた目黒川周辺の原風景を再生することを目指し、斜面林、草地、湧水とせせらぎ等の水辺、水田を整備している。植栽に関しては地域性に即し、関東周辺に自生している個体に由来して生産されている地域性種苗を用いている。また、多様な昆虫や鳥類が利用できるよう、食餌植物や蜜源となる植物を選択的に植栽している。水田は年間を通して水が涸れないように配慮し、ヤゴをはじめとした生物がすめる環境を整備している。

樹木の管理計画としては、樹高 6m を越えた木に関して剪定を行う以外は、過度な剪定を行わず植物の本来の樹形を維持するように管理している。草本に関してはチガヤーススキ群落が維持できる程度の管理を継続して実施している。

施設名称	おおはし里の杜（大橋換気所屋上自然再生緑地）
敷地面積	1,176 m ²
緑地面積	908 m ²
用 途	屋上型ビオトープ
着 工	2010 年 12 月
竣 工	2011 年 8 月
環境対策	LED 照明の採用 雨水再利用システムの導入



図. 目黒川周辺の原風景を再生した植栽（2026 年 6 月撮影）



図. 在来種が維持された草本群落（2026 年 6 月撮影）



図. 多様な水生生物を育む水田（2026 年 6 月撮影）



図. 季節の彩りを感じさせるカワラナデシコ（2026 年 6 月撮影）

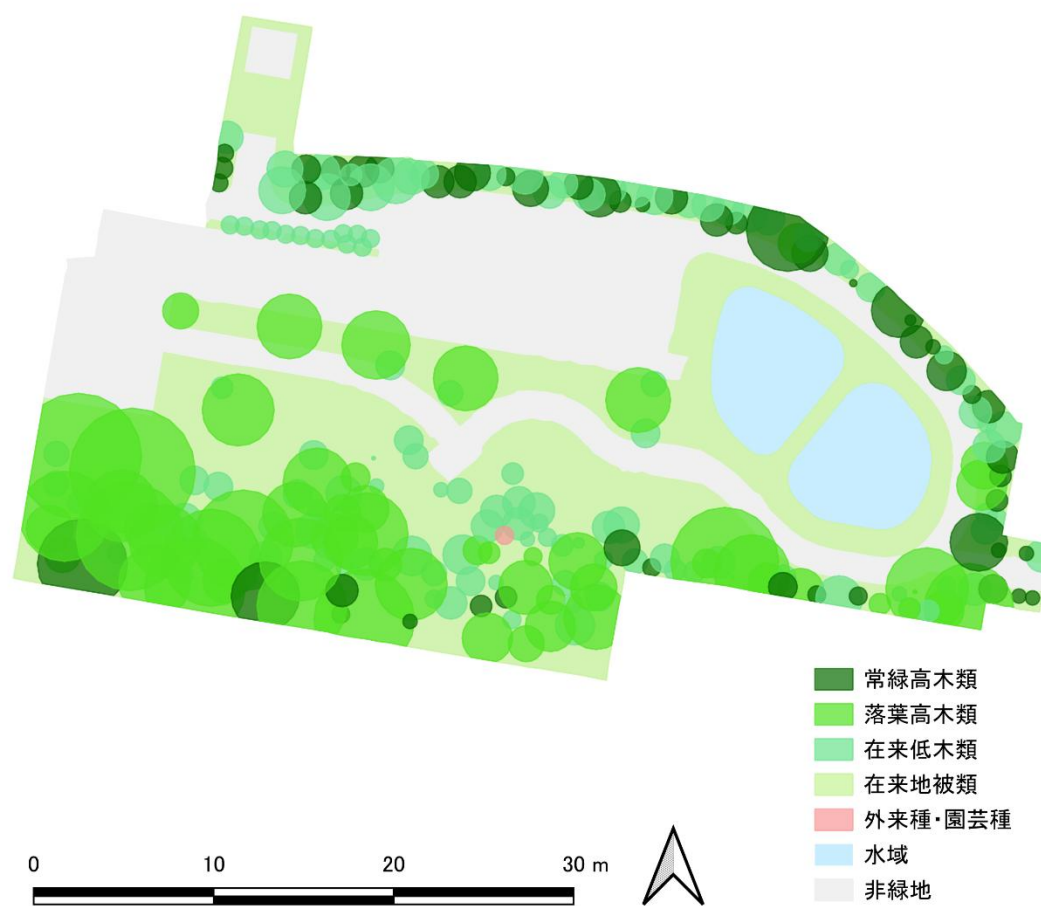


図. 2026 年（更新年）における植生等の分布

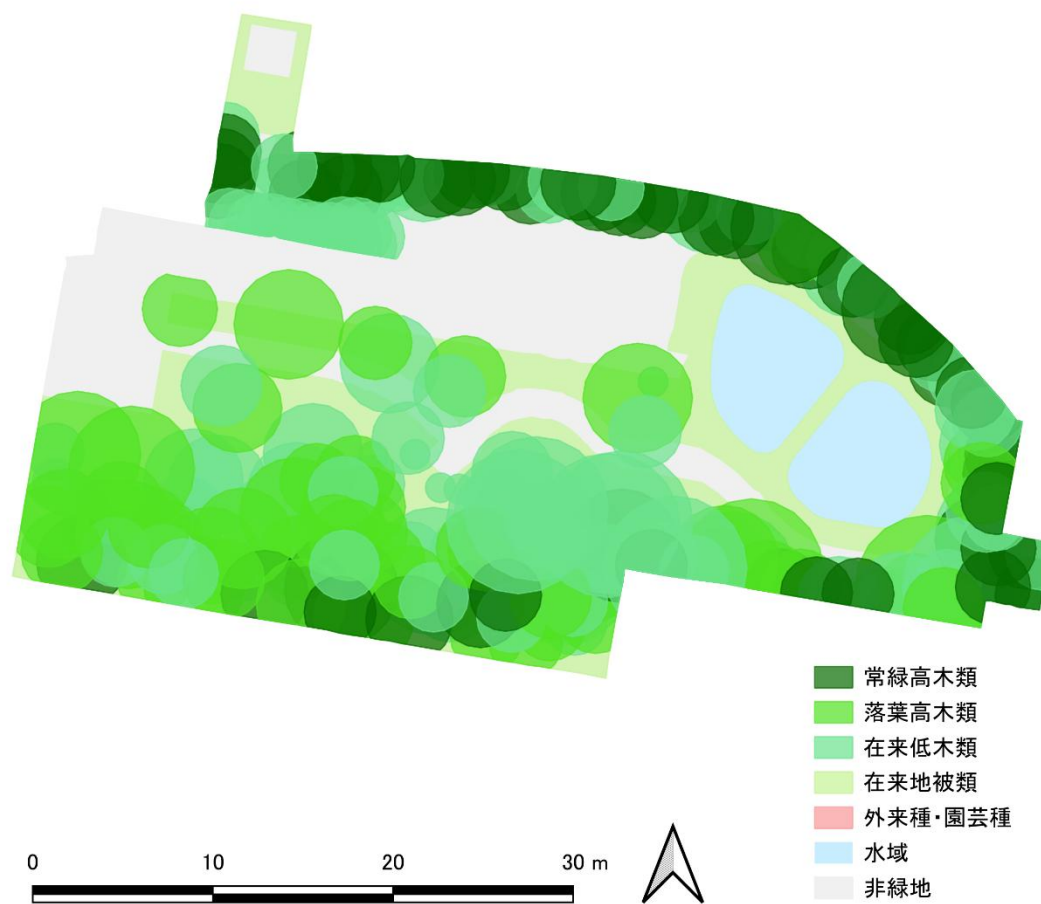


図. 2076 年（更新年の 50 年後）における植生等の分布

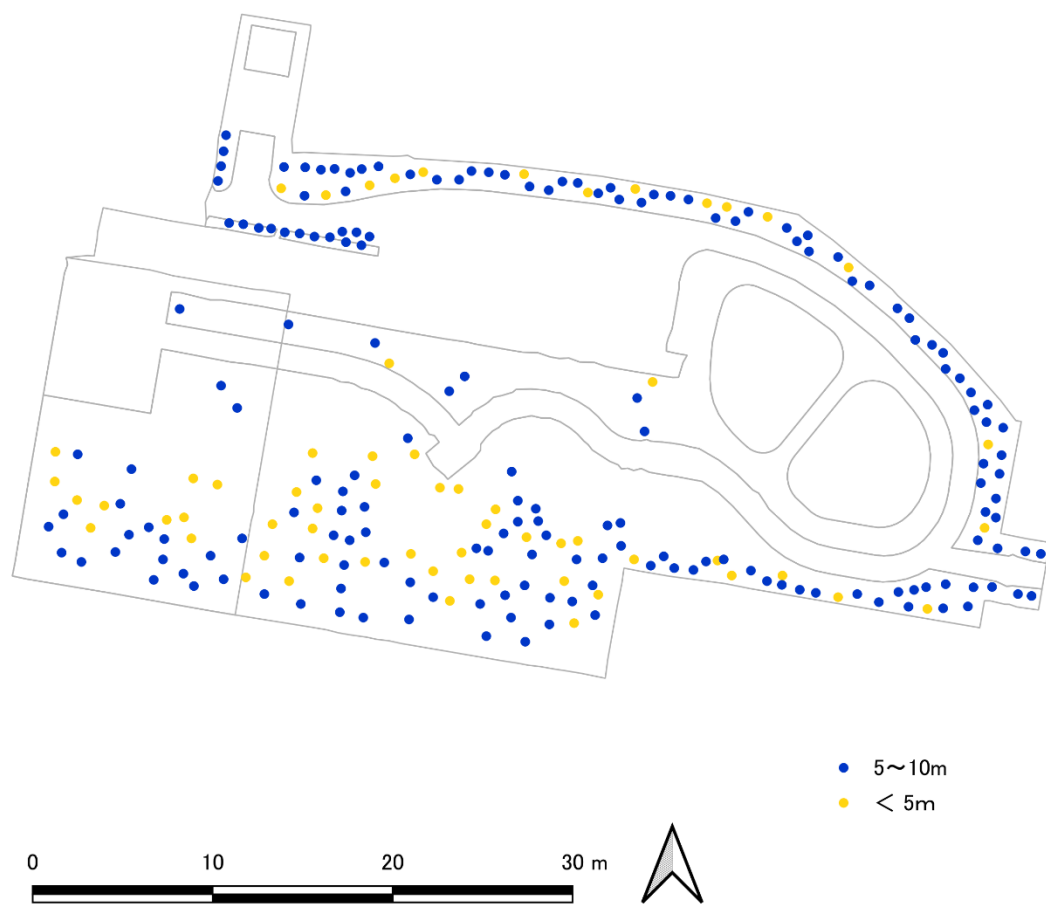


図. 管理上予定している将来樹高

2.緑地割合

JHEP の定義に従った当該評価区域の緑地割合は 81.7%であり、JHEP 認証に関する緑化条件は満たされている。

IV. 評価結果

1. 保全再生目標等の設定

1-1. 保全再生目標

植生については、評価対象地において成立しうる自然植生の系列に基づいた自然植生の保全・再生を目標とする。動物に関しては、評価区域の立地条件および設定された目標植生に生息し、希少性や固有性、栄養段階などの高い種や人為影響を受けやすい種などを中心として保全を図ることを目標とする。

1-2. 基準年の状況

基準年（2000 年）から過去 30 年間のハビタットの状況を、空中写真を用いて把握した。

空中写真の判読の結果、基準年には評価対象地内に植生は認められなかった。1963 年、1974 年、1979 年には西側の建物脇にわずかに高木が確認された。1984 年の空中写真では駐車場に変わっており、評価対象地内に植生は確認できなかった。その後、首都高速道路株式会社が工事を実施するまで大きな変化は認められなかった。

1-3.環境タイプの分布状況

JHEP では「環境タイプ」という概念を設けている。環境タイプは、ランクの高い順に「1. 湿性環境、樹林」－「2. 低木・草地・竹林」－「3. 人工地」と定義している。対象地内を環境タイプで区分し、単位区画ごとに、原則として基準年以前の30年間と初回申請年以前の30年間が重なる期間（環境タイプ設定期間）における環境タイプの変遷を確認する。その期間で最も高いランクの環境タイプを、その単位区画における基準年以前の環境タイプとしている。

1-2において基準年を2000年とし、1970年～2000年の空中写真判読の結果、1979年時点では環境タイプ1と3のタイプが確認された。基準年以前で最も高い環境タイプの面積割合は、環境タイプ1（樹林）が約1%、残りは環境タイプ3（人工地）であった。1984年以降の空中写真では植生が確認されなかった。

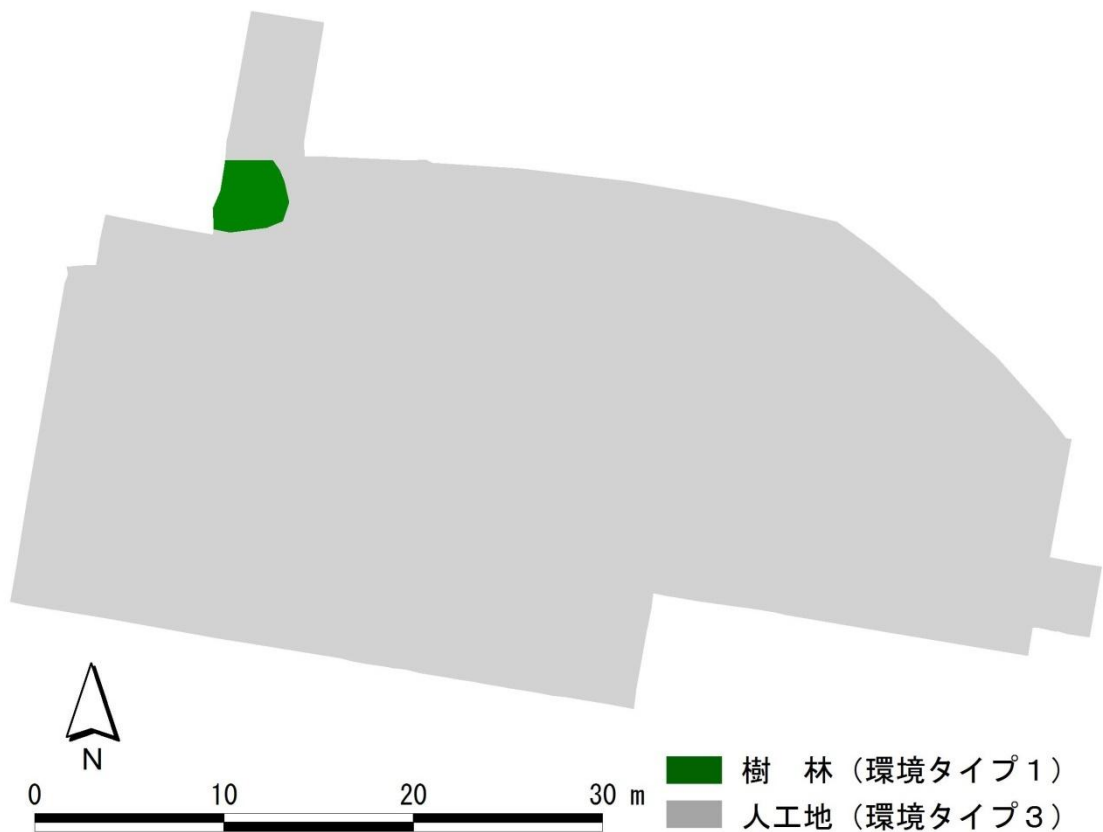


図. 基準年以前における環境タイプの分布

1-4.自然植生の遷移系列

対象地を含む当該地域の地形や気候条件から、自然植生（現状から人為を取り去ったと仮定した時に最終的に成立すると考えられる植生）に至る遷移系列について整理した。

対象地が位置する目黒区は、武蔵野台地の東南部に位置している。区内は目黒川と呑川が北西から南東に向かってとい状の谷を作っており、台地と谷の部分から成り立っている（目黒区施設白書 2014*）。

おおはし里の杜は目黒川沿いの谷部（谷底平野）に位置し、海拔 15m 前後の場所に位置している。関東地方のこうした条件下における潜在自然植生は、シラカシ群集とされる。

また、谷底平野の中でも地下水位が高い場所では、カサスゲ群集、ウキヤガラ-マコモ群集などの湿性環境を好む植物を主とした群落が成立する（宮脇（編）1986†）。

シラカシ群集を極相林とする立地では、二次草原のチガヤーススキ群落がはじめに成立し、攪乱頻度の低下に伴ってアズマネザサーススキ群落へと移行する。その後に常緑広葉樹林域の先駆的二次林であるクサイチゴータラノキ群集を経て、二次林であるクヌギ-コナラ群集、シラカシ群集へと遷移していく。

チガヤーススキ群落はチガヤとススキを主な構成種に持ち、年一回以上の刈り取りや火入れによって成立する。アズマネザサーススキ群落はチガヤーススキ群落の攪乱が減ることによって、草丈の大きなススキが優先した植生である。

クサイチゴータラノキ群集はさらに遷移が進行し、カラスザンショウやアカメガシワといった先駆樹種が優占する先駆的二次林である。その後、クヌギをはじめとした落葉広葉樹の優占する二次林のクヌギ-コナラ群集へと遷移し、最終的に常緑広葉樹のシラカシを主とした極相林へと遷移する。

一方で、谷底平野に位置し、攪乱によって成立した湛水状態の浅い水辺では、コナギなどの抽水植物が優占する群落が成立する。その後、水位が維持された状態で遷移が進むと、カサスゲやヨシなどの生えるカサスゲ群集、マコモやヨシ等の植物の生えるウキヤガラ-マコモ群集などの低層湿原へと遷移する。これらの群落は地下水位の変動がない限り継続する。（宮脇ほか 1990‡）。

* 目黒区企画経営部施設改革課（2014）目黒区施設白書 9p, 目黒区.

† 宮脇昭（編）（1986）日本植生誌 関東 至文堂

‡ 宮脇昭, 奥田重俊（1990）日本植物群落図説 至文堂

以上を下表に整理した。

表. 自然植生に至る遷移系列の推定

遷移段階	群集名	環境タイプ
極相林	シラカシ群集	樹林タイプ
二次林	クヌギーコナラ群集	
先駆的二次林	クサイチゴータラノキ群集	低木・草地・竹林タイプ
二次草原	アズマネザサーススキ群落 チガヤーススキ群落	

遷移段階	群集名	環境タイプ
湿性環境 (低層湿原)	カサスゲ群集 ウキヤガラーマコモ群集	樹林タイプ
湿性環境 (水田雑草群落)	コナギ群落 [§]	

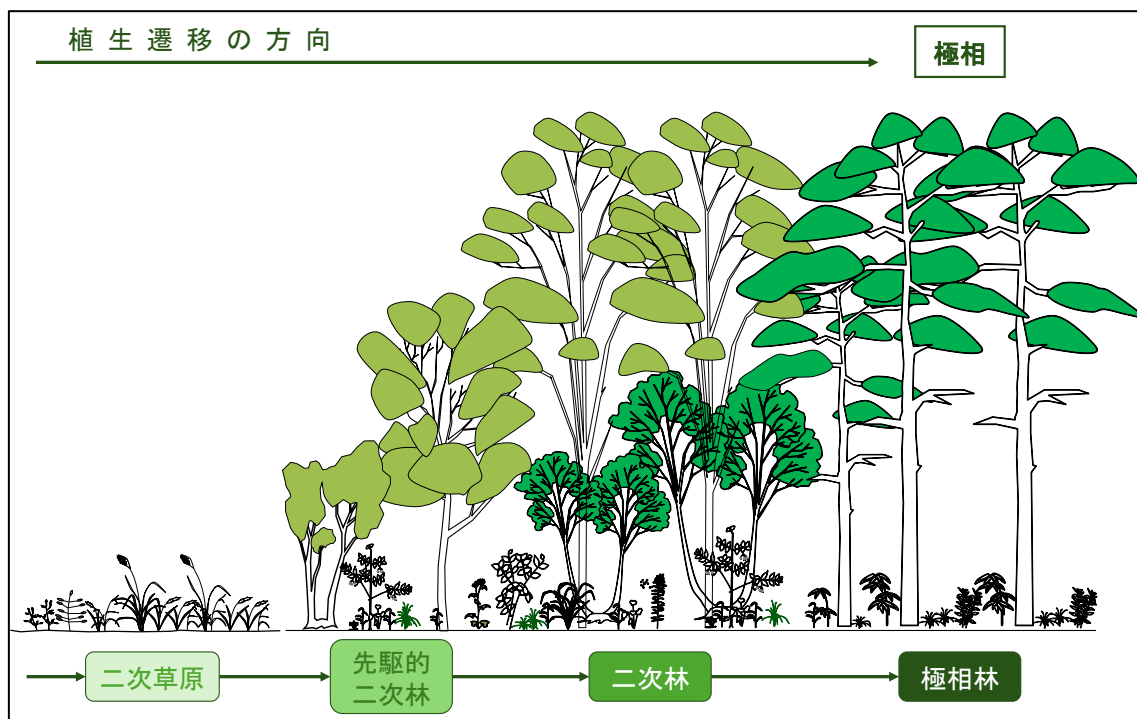


図. 目標植生の遷移段階イメージ

[§] ウリカワーコナギ群集の種組成データからイネの出現がない（少ない）データを集めたデータを便宜的にコナギ群落とし、目標植生として扱った。

1-5.目標植生

環境タイプの分析より、本事業において目標とする植生群集と面積は、樹林タイプとしてシラカシ群集を 757.4 m²、草地タイプとしてチガヤーススキ群落を 115.1 m²、湿性環境タイプとしてコナギ群落を 88.4 m²と設定した。残りは園路などの非緑地である。

目標植生の分布を下図に示した。

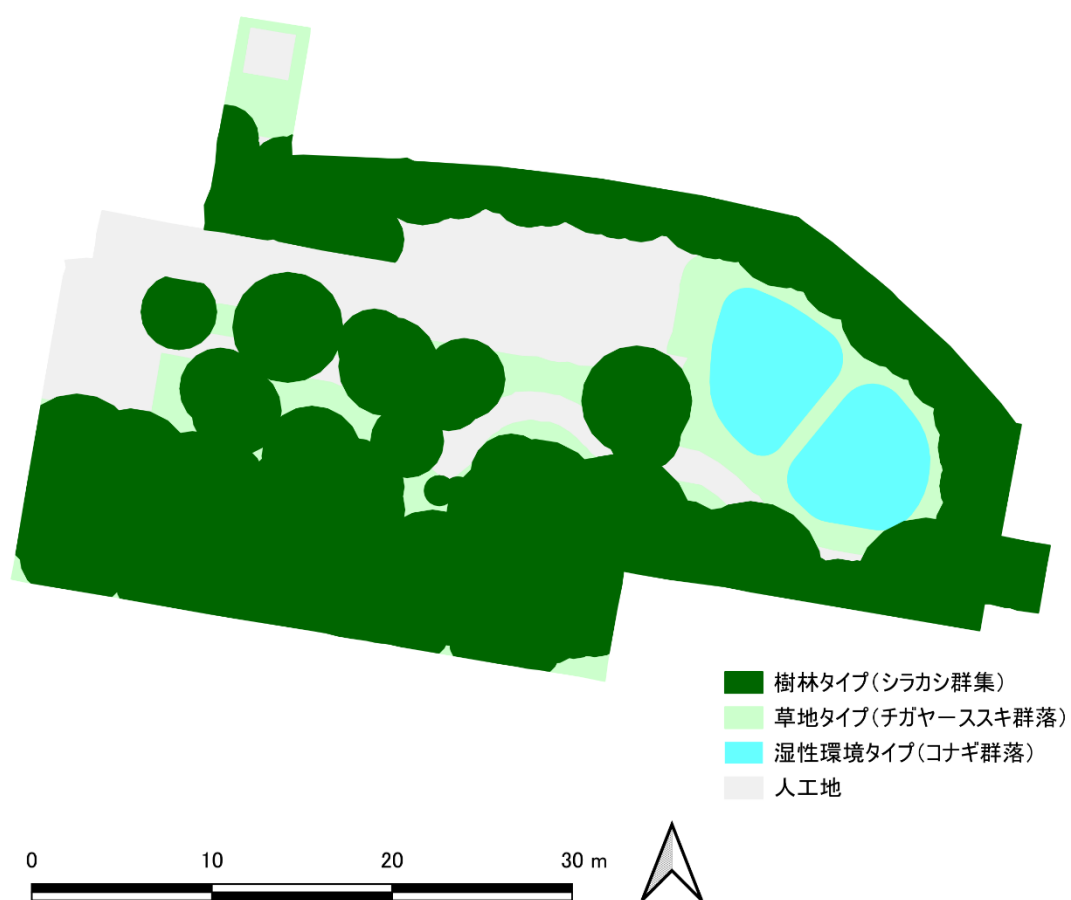


図. VEI 算出のための目標植生の分布

基準年と事業計画および設定された目標のそれぞれにおける環境タイプの面積割合を下图に示した。

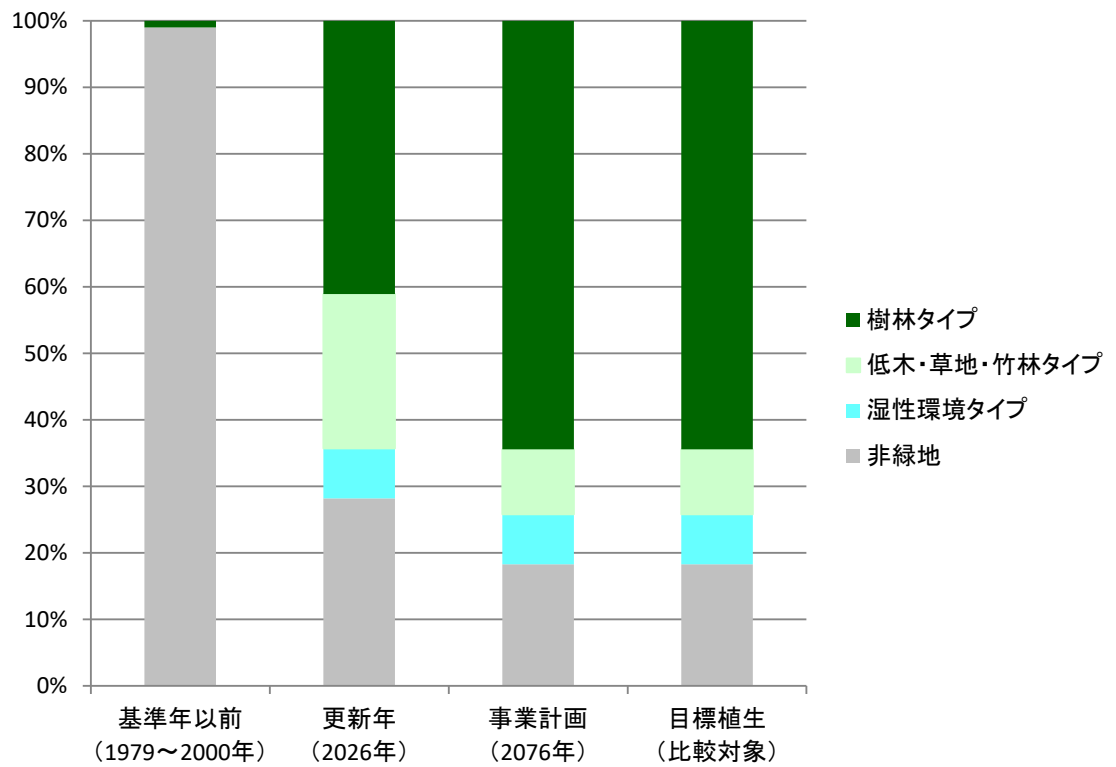


図. 環境タイプの面積割合

1-6.評価種の選定

(1) 選定プロセス

評価種は、樹林タイプについては、シラカシ群集に生息する種を含む分類群の中から選定することとした。草地タイプ、湿性環境タイプも同様にチガヤーススキ群落、コナギ群落それぞれに生息する種を含む分類群の中から選定を行った。また、効率的に分析を進めるため、HSI モデルがすでに開発されている種、または十分な生態情報が存在する種を対象とした。その結果、鳥類と昆虫類から選出した。

本事業の規模は約 1000 m²であり、対応する行動圏クラスは 1 となる。鳥類と昆虫類それぞれの中から、この行動圏クラスに該当する動物種を抽出した。

(2)選定結果

樹林の評価種としては鳥類のシジュウカラが、昆虫類のコミスジが選定された。草地の評価種としては昆虫類のショウリョウバッタが、湿性環境の評価種としては昆虫類のアオモンイトトンボが選定された。

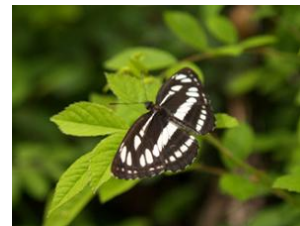
シジュウカラ

本種は、日本国内では、北海道から南西諸島まで留鳥として広く分布する。低山帯から低地、樹林の多い公園や人家など、幅広い環境に生息する。都市域や工場地帯などにおいても比較的生息の可能性が高く、市民がさえずりを耳にする機会が多いと考えられる。昆虫類や漿果などを食べる。



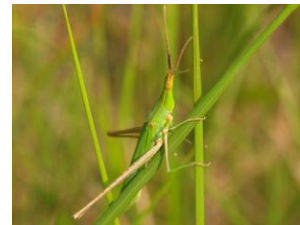
コミスジ

平地から低山地の林縁、またそれらが近接する緑の多い市街地で見られる。緑被量との相関が強く、スギやヒノキの人工林よりも広葉樹林を好むなど、良質な樹林の指標となりうる。



ショウリョウバッタ

日本に分布するバッタの中では最大で、斜め上に尖った頭部が特徴的である。ススキやチガヤなどに覆われた、丈の低い明るい草原に生息する。都市域や工場地帯などにおいても比較的生息の可能性が高い。イネ科の植物を主に食べる。



アオモンイトトンボ

平地～丘陵地の抽水植物の生える開放的な池沼や河川に生息する。抽水植物等が比較的少ない環境を好む。幼虫（ヤゴ）で越冬するため、冬季も水のある環境が必要である。都市部においても比較的生息の可能性が高い。



2.植栽植物等の確認（要件 3 の確認）

本事業において植栽された植物種について、審査実施時点における生態系被害防止外来種リスト掲載種との照合を行い、同リストの掲載種が含まれないことを確認した。

3.評価基準値の算出

3-1.方法

評価基準値は、基準年（2000 年）から過去 30 年の間で空中写真の撮影されているなかでは、1979 年が最も植生の成熟した状態であると推察された。このため、評価基準値は、1979 年を含む、1970 年～2000 年の平均値を採用した。

1-2 における空中写真判読の結果、対象地における VEI（植生評価指数、植生の地域らしさ）および HSI（ハビタット評価指数、動物評価種のすみやすさ）を、以下のよう

(1) VEI

1-2 で判読した空中写真をもとに、植生を GIS データ化した。これらの VEI 値については、日本植生誌関東（宮脇(編)1986**）、東京都の植生（奥富ほか 1987††）および当協会が独自に取得したデータを参考に算出した。

評価区域全体の VEI は、相観植生ごとの VEI を面積で加重平均して算出した（植生が存在しない区域の VEI は 0 点とした）。

(2) HSI

3-1 (1) で作成した植生データを、高さ（高木、亜高木、低木、地被）および葉の形状（広葉樹、針葉樹）の観点から整理した。それぞれの被度については、当協会が独自に取得したデータを参考にし、高木と亜高木については、HC1～2 層に該当する被覆部の被度を 80%、HC3～4 層に該当する被覆部の被度を 40%、低木については、HC3 層に該当する被覆部の被度を 80%、HC4 層に該当する被覆部の被度を 40%、地被については、HC4 層の被度を 80%とした。（ただし、芝草地は HC4 層の被度を 100%とした）

ハビタット変数をそれぞれの HSI モデルに入力し、HSI を求めた。得られた HSI を該当する環境タイプの面積比率で割った値を「該当する環境タイプにおける HSI (HSI_{hab})」とした。HSI_{hab} に 100 を乗じた値を「該当する環境タイプにおけるハビタット得点 (HS_{hab})」とし、HS_{hab} に該当する環境タイプの面積比率を乗じたものを「ハビタット得点 (HS)」とした。

**宮脇昭（編）（1981）日本植生誌 7 関東．至文堂，東京．

††奥富清（1987）東京都現存植生図．東京都環境保全局自然保護部

3-2.結果

評価種および植生ごとに、1979 年におけるハビタット得点を 50 年間延長したものを下図に示した。

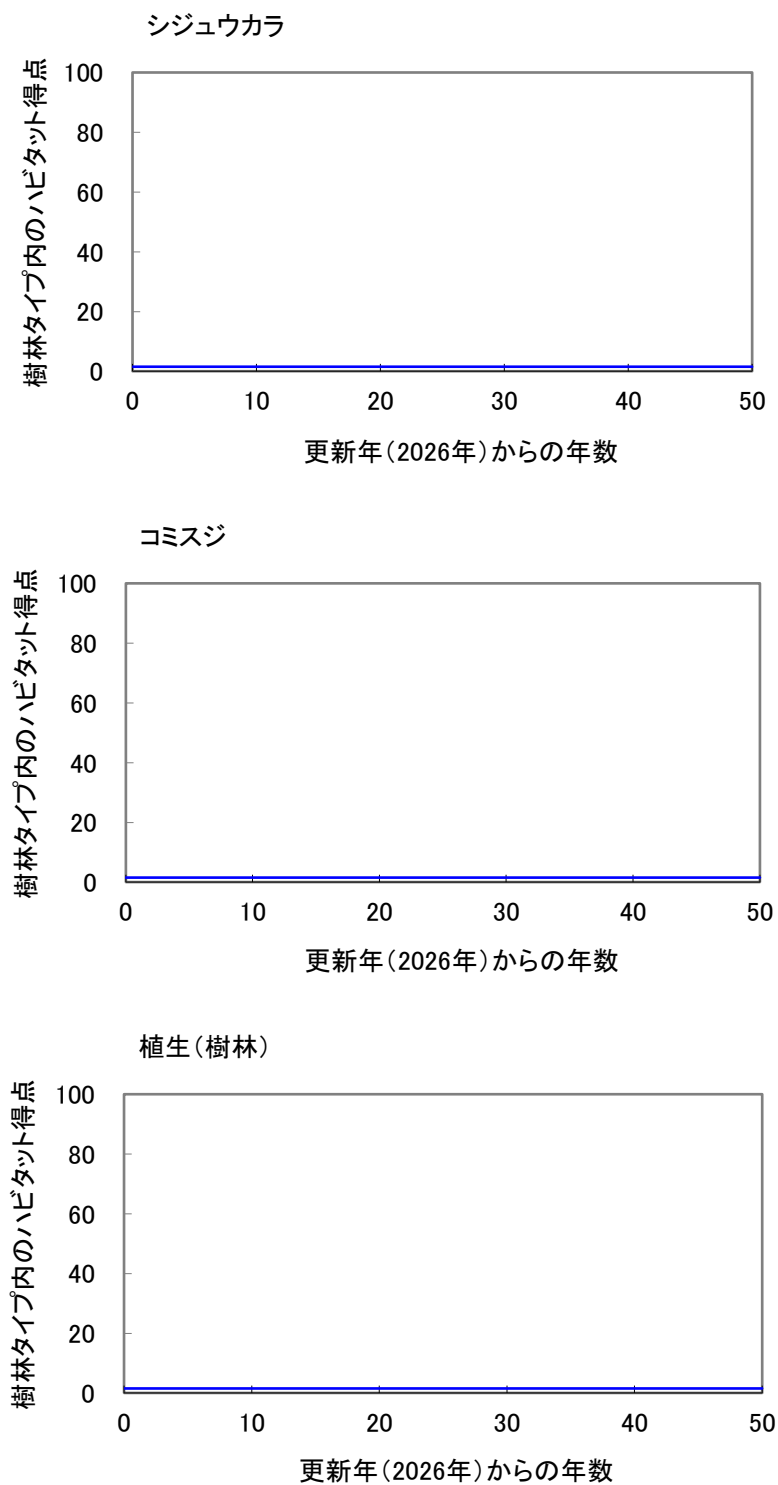


図. 評価種および植生ごとの評価基準値

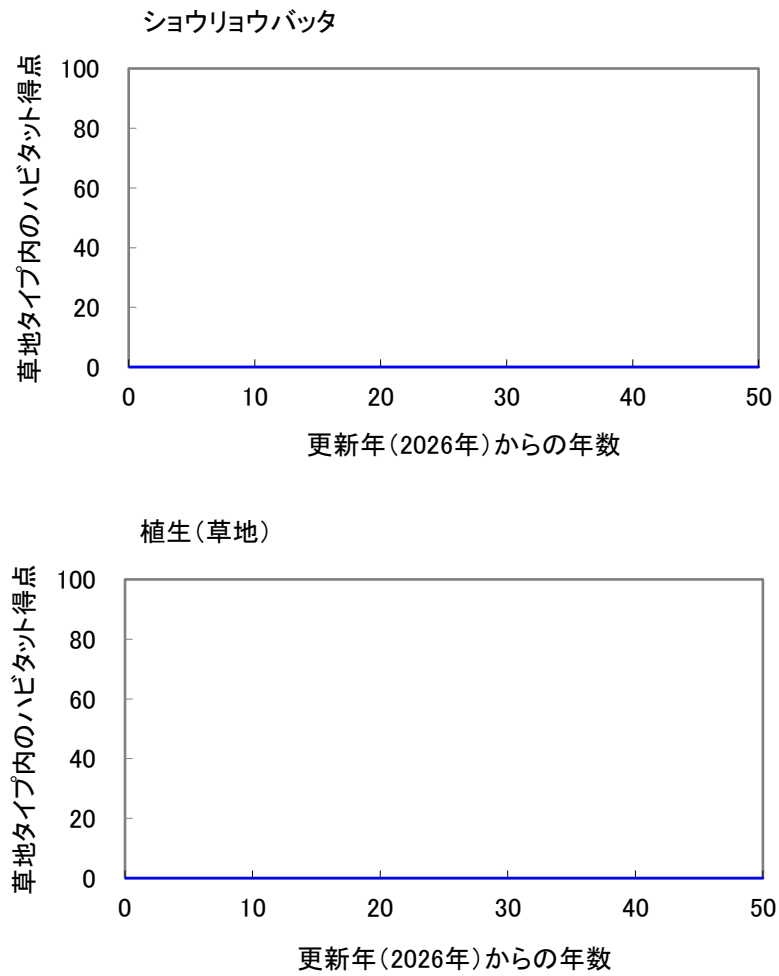


図. 評価種および植生ごとの評価基準値

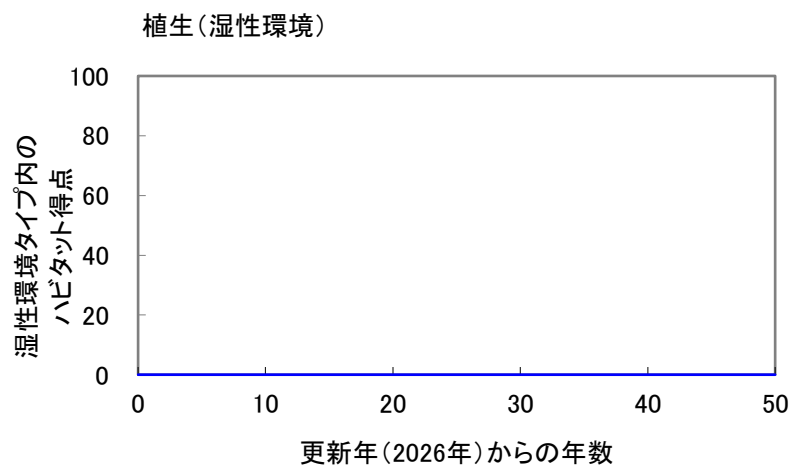
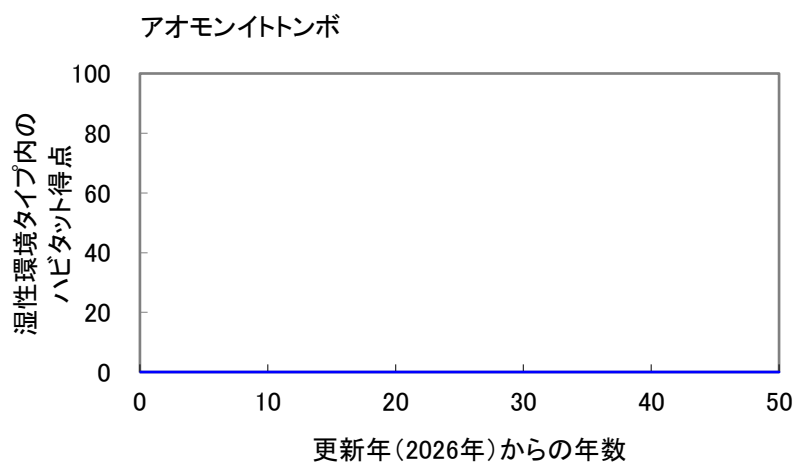


図. 評価種および植生ごとの評価基準値

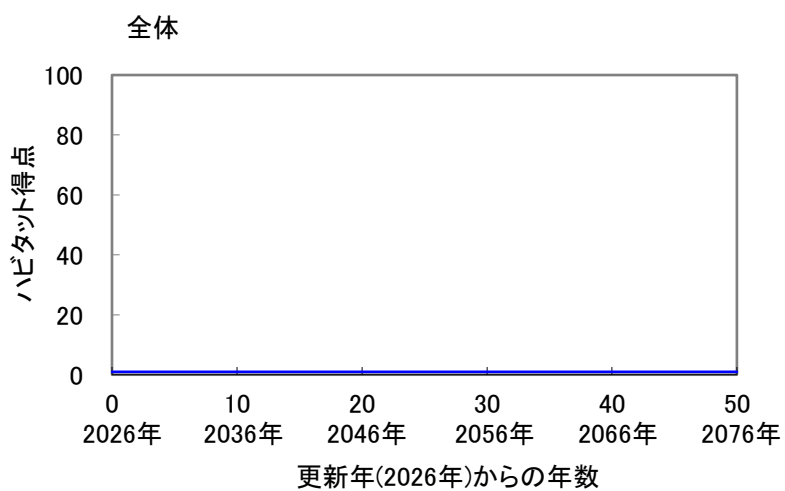


図. 全体での評価基準値

評価基準値を下表に示した。

表. 評価基準値

目標環境タイプ	面積比率	分類群	評価種	環境タイプ内の 年平均ハビタット得点	年平均 ハビタット得点*
樹林	0.644	動物	シジュウカラ	1.6	1.0
			コムスジ	1.6	1.0
			動物平均 F1	1.6	1.0
		植生 F2		1.6	1.0
		樹林の平均 $F = (F1+F2)/2$		1.6	1.0
草地	0.098	動物 G1	ショウリョウバッタ	0.0	0.0
		植生 G2		0.0	0.0
		草地の平均 $G = (G1+G2)/2$		0.0	0.0
湿性環境	0.075	動物 W1	アオモンイトトンボ	0.0	0.0
		植生 W2		0.0	0.0
		湿性環境の平均 $W = (W1+W2)/2$		0.0	0.0
非緑地	0.183			0.0	0.0
全体					1.0

* 環境タイプ内の年平均ハビタット得点に目標環境タイプの面積比率を乗じた値

4.事業によるハビタット得点の算出

4-1.方法

樹木の管理予定としては、樹高 6mを越えた木に関して剪定を行う以外は、過度な剪定を行わず植物の本来の樹形を維持するように管理していくものとしている。草本に関してはチガヤーススキ群落が維持できる程度の管理を継続して実施していくものとしている。

各植栽木の樹高および樹冠半径を、樹木の成長モデルから予測した。その結果、対象地の植栽木は、2065 年（更新年の 39 年後）には管理上の制限樹高の 6mに至ると予測された。

以上より、2026 年（更新年）、2065 年（更新年の 39 年後）、2076 年（更新年の 50 年後）の 3 時点の VEI および HSI を算出した。

(1) VEI

B1～K 層に該当する植物種ごとの被度割合を算出し、VEI を求めた。評価区域全体の VEI は、相観植生ごとの VEI を面積で加重平均して求めた（植生が存在しない区域の VEI は 0 点とした）。

(2) HSI

各樹種の樹冠および地被類や低木類の植え込みを GIS 上に図化し、HC1～HC4 層の各階層における被覆割合を算出した。階層ごとの植物被度は、当協会が独自に取得したデータを参考に被覆割合の 80%とした。ただし、低木・地被類の HC3 層の被度については、植栽区画ごとに植物高 0.5m 以上の植栽被覆割合の 80%とし、芝草地は HC4 層の被度を 100%とした。

4-2.結果

得られた HSI と VEI に 100 を乗じて、各時期におけるハビタット得点を求めた。その推移を下图に示した。

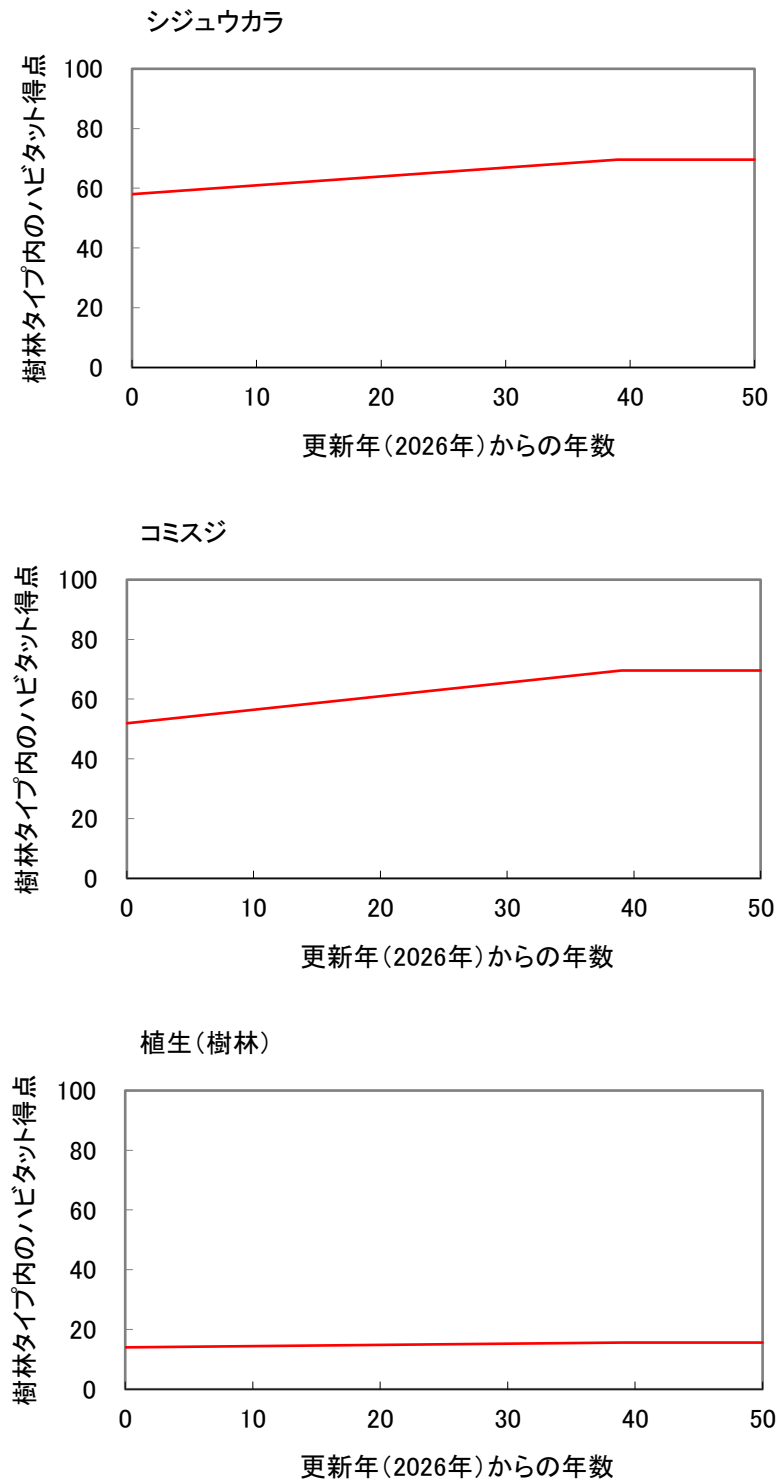


図. 事業により得られる評価種および植生ごとのハビタット得点の推移

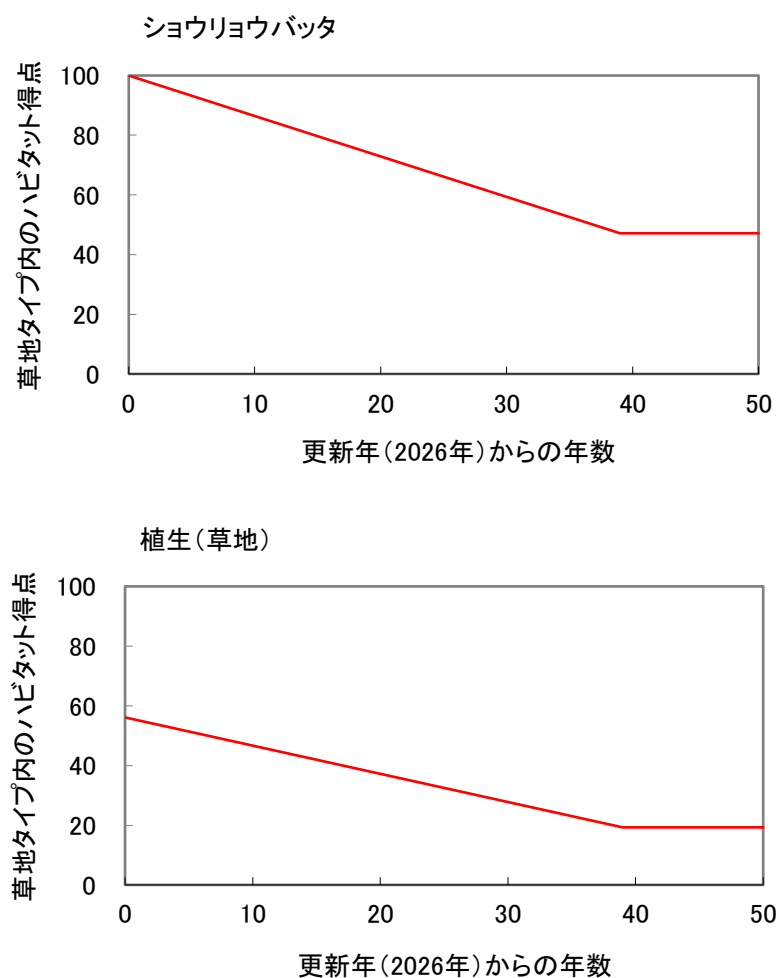


図. 事業により得られる評価種および植生ごとのハビタット得点の推移**

** 年数の経過に伴う樹林面積の拡大に伴い、目標植生（低木・草地・竹林タイプ）の面積割合よりも草地の面積割合が縮小することから、見かけ上の同タイプのハビタット得点が増加しているが、同タイプの質的な減少を示すものではない。

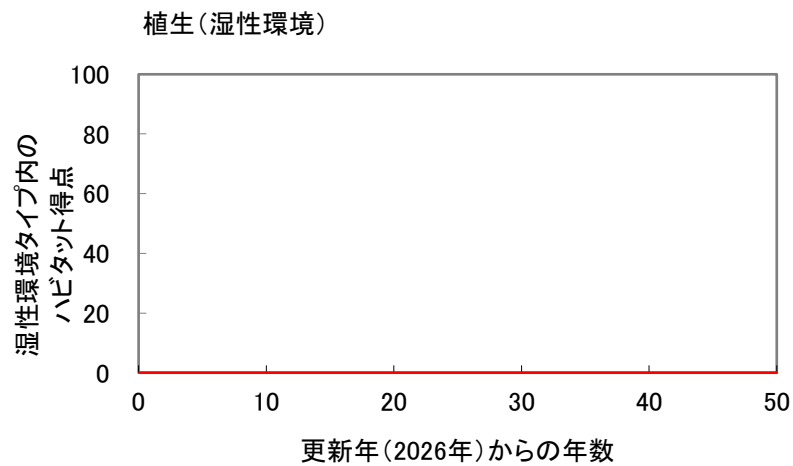
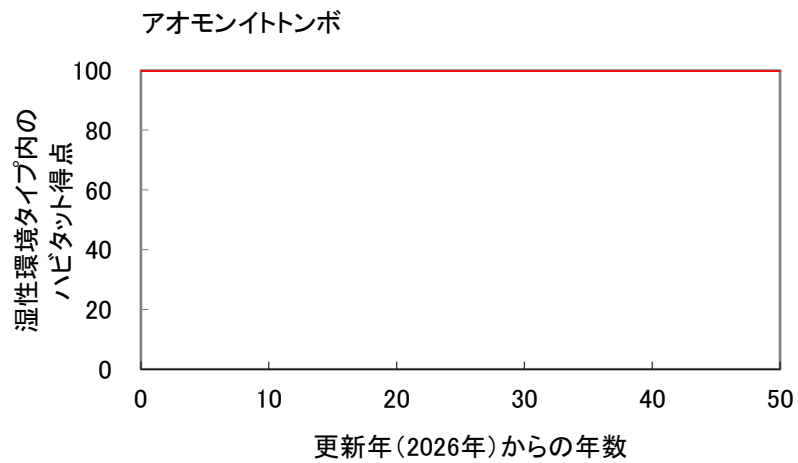


図. 事業により得られる評価種および植生ごとのハビタット得点の推移

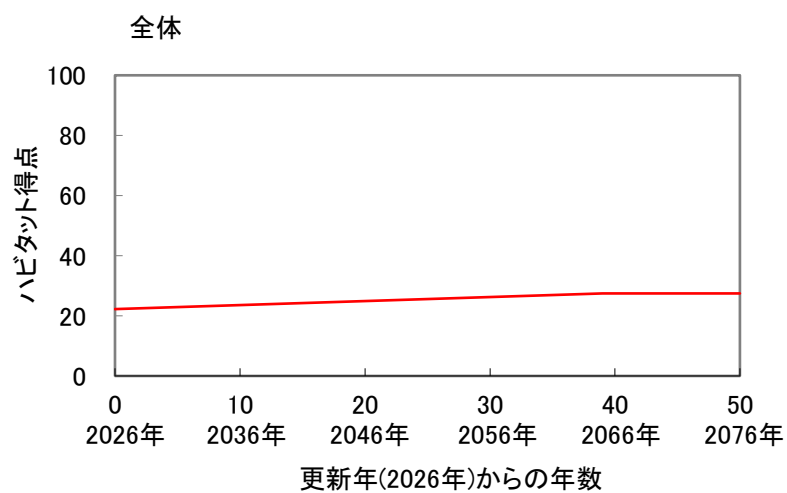


図. 事業により得られる全体でのハビタット得点の推移

本事業により得られると予想された年平均ハビタット得点を下表に示した。

表. 事業により得られる年平均ハビタット得点

目標環境タイプ	面積比率	分類群	評価種	環境タイプ内の 年平均ハビタット得点	年平均 ハビタット得点*
樹林	0.644	動物	シジュウカラ	65.0	41.9
			コムスジ	62.7	40.4
			動物平均 F1	63.9	41.1
		植生 F2		15.0	9.6
		樹林の平均 F = (F1+F2)/2		39.4	25.4
草地	0.098	動物 G1	ショウリョウバッタ	67.8	6.6
		植生 G2		33.7	3.3
		草地の平均 G = (G1+G2)/2		50.7	5.0
湿性環境	0.075	動物 W1	アオモンイトトンボ	100.0	7.5
		植生 W2		0.0	0.0
		湿性環境の平均 W = (W1+W2)/2		50.0	3.8
非緑地	0.183			0.0	0.0
全体					34.1

* 環境タイプ内の年平均ハビタット得点に目標環境タイプの面積比率を乗じた値

5.更新年の 50 年後におけるハビタット得点（要件 2 の確認）

更新年（2026 年）の 50 年後における HSI と VEI に 100 を乗じて、各評価種と植生のハビタット得点を求め、下表に整理した。

表. 50 年後のハビタット得点

目標環境タイプ	面積比率	分類群	評価種	環境タイプ内のハビタット得点	ハビタット得点*
樹林	0.644	動物	シジュウカラ	69.6	44.8
			コムシジ	69.6	44.8
			動物平均 F1	69.6	44.8
		植生 F2		15.6	10.1
		樹林の平均 F = (F1+F2)/2		42.6	27.4
草地	0.098	動物 G1	ショウリョウバッタ	47.2	4.6
		植生 G2		19.3	1.9
		草地の平均 G = (G1+G2)/2		33.3	3.3
湿性環境	0.075	動物 W1	アオモンイトトンボ	100.0	7.5
		植生 W2		0.0	0.0
		湿性環境の平均 W = (W1+W2)/2		50.0	3.8
非緑地	0.183			0.0	0.0
全体					34.4

* 環境タイプ内のハビタット得点に目標環境タイプの面積比率を乗じた値

* 年数の経過に伴う樹林面積の拡大に伴い、目標植生（低木・草地・竹林タイプ）の面積割合よりも草地の面積割合が縮小することから、見かけ上の同タイプのハビタット得点が減少しているが、同タイプの質的な減少を示すものではない

6.評価値（要件 4 の確認）

4 で求めた事業により得られる年平均ハビタット得点から、3 で求めた評価基準値を引くと、評価値は以下の通りとなった。

表. 評価結果

目標環境タイプ	面積比率	分類群	評価種	評価値*
樹林	0.644	動物	シジュウカラ	+40.9
			コミスジ	+39.4
			動物平均 F1	+40.1
		植生 F2		+8.6
		樹林の平均 $F = (F1+F2)/2$		+24.4
草地	0.098	動物 G1	ショウリョウバッタ	+6.6
		植生 G2		+3.3
		草地の平均 $G = (G1+G2)/2$		+5.0
湿性環境	0.075	動物 W1	アオモンイトトンボ	+7.5
		植生 W2		+0.0
		湿性環境の平均 $W = (W1+W2)/2$		+3.8
非緑地	0.183			0.0
全体				+33.1

評価種および植生ごとに、評価基準値（青色）とハビタット得点（赤線）の推移を下図に示した。

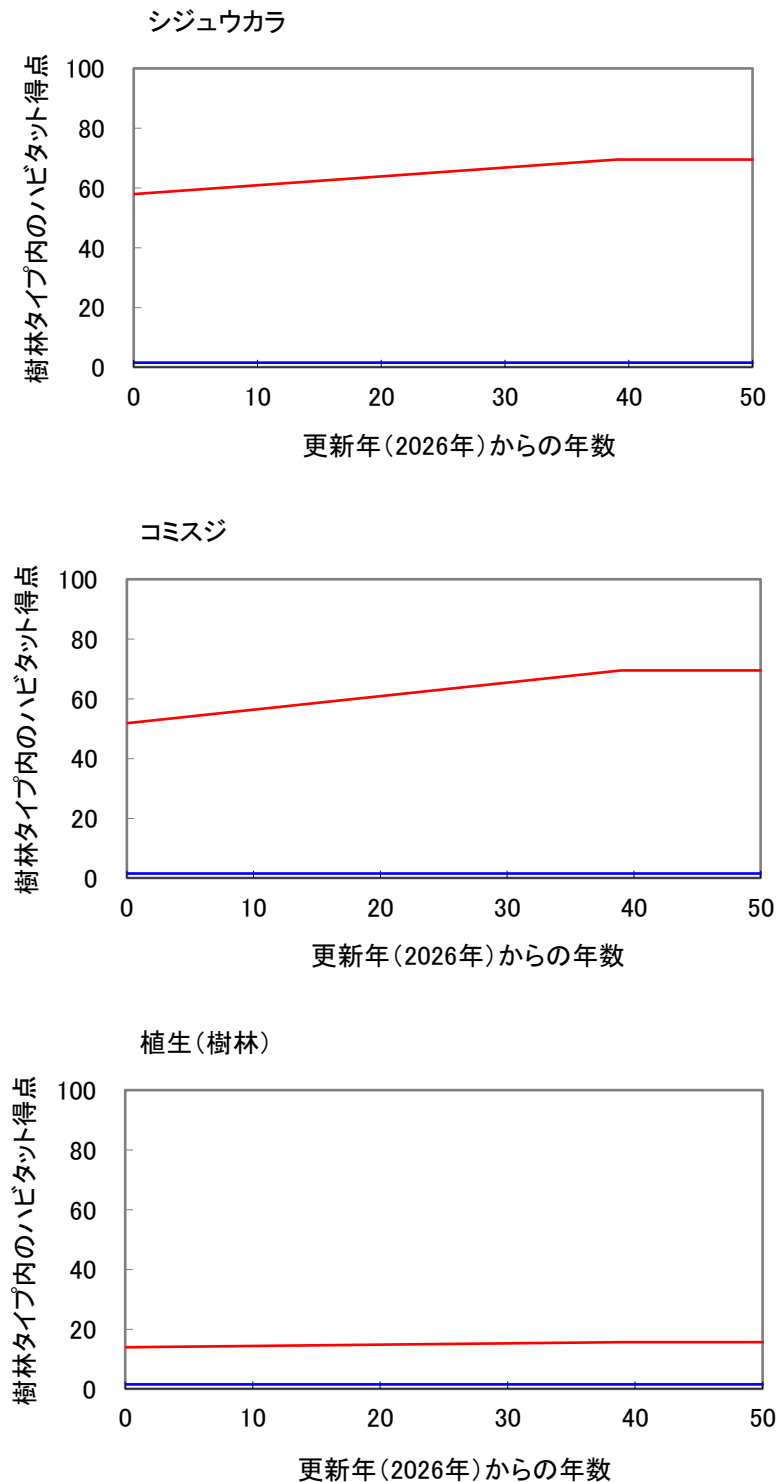


図. 評価種および植生ごとの評価基準値とハビタット得点の推移

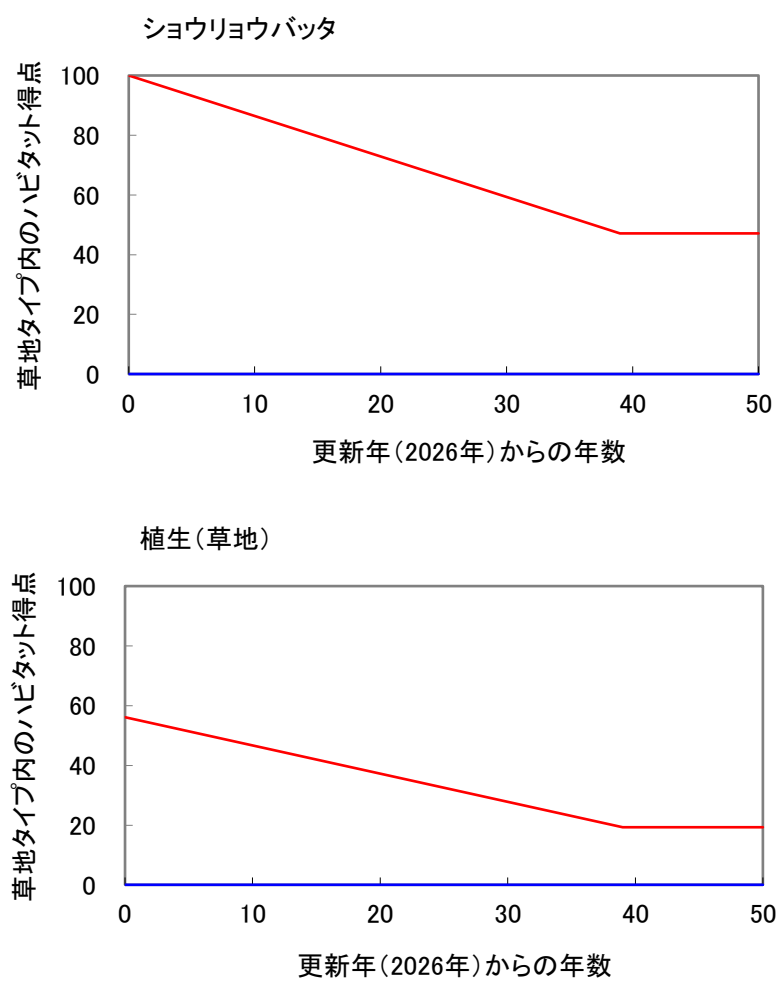


図. 評価種および植生ごとの評価基準値とハビタット得点の推移

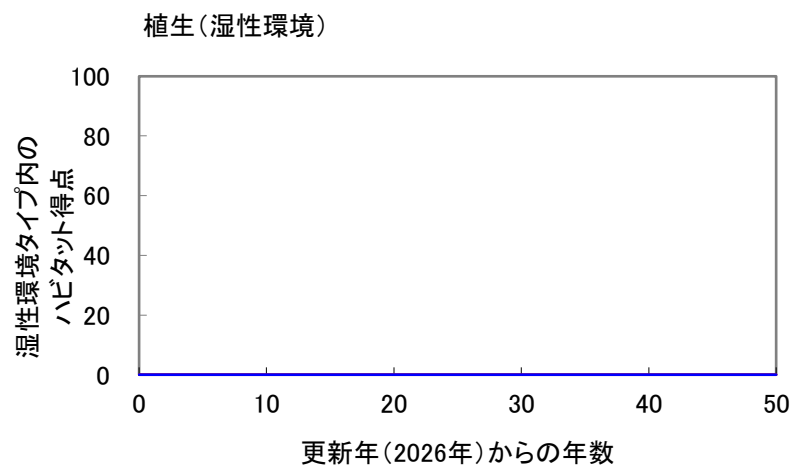
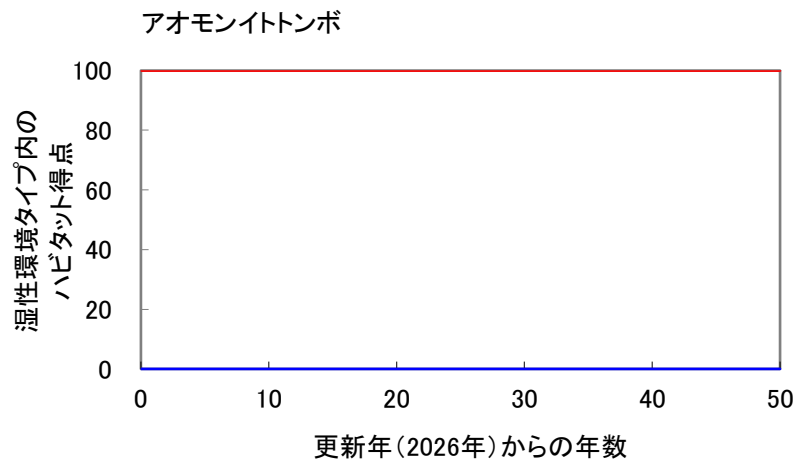


図. 評価種および植生ごとの評価基準値とハビタット得点の推移

全体における評価基準値（青線）とハビタット得点（赤線）の推移を下図に示した。

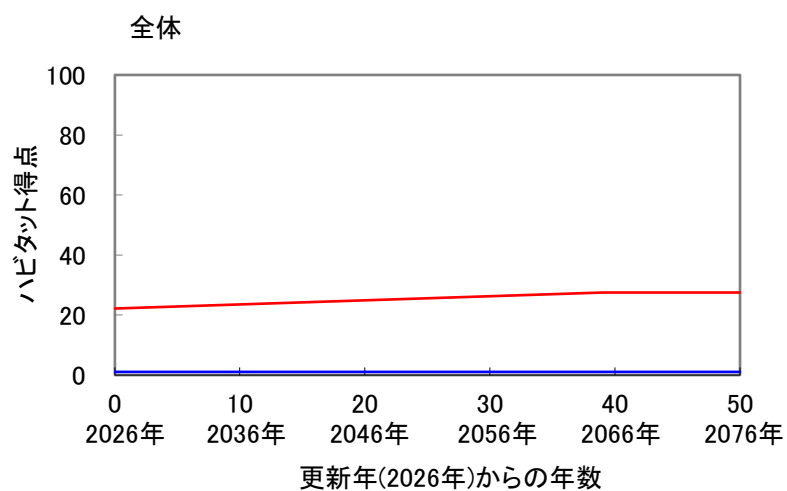


図. 全体での評価基準値とハビタット得点の推移

V. 審査結果

IV章の結果に従い、認証要件ごとの結果を以下に整理する。

要件 2（ハビタットの質要件）

ハビタット得点が将来までに 8 点以上となることが見込まれる。なお、条件によっては、他のサイトにおいて得られた評価値の一部またはすべてを、評価対象事業に移転すること（オフサイト代償）で、本要件を満たすことも可能である。

更新年（2026 年）の 50 年後におけるハビタット得点は 34.4 点と予測された^{§§}。このため、本事業は要件 2 を満たすものと認める。

要件 3（外来種要件）

生態系被害防止外来種を使用しない。

本事業において植栽された植物種について、審査実施時点における生態系被害防止外来種リスト掲載種との照合を行い、同リストの掲載種が含まれないことを確認した。

このため、本事業は要件 3 を満たすものと認める。

要件 4（更新要件）

評価対象事業で得られる、更新年から 50 年間ににおける年平均ハビタット得点が、評価基準値以上となる。なお、ここで得られた年平均ハビタット得点を前回認証時の年平均ハビタット得点から引いた値は 10 以下である必要がある。

本事業において、更新年から 50 年間ににおける年平均ハビタット得点は、評価基準値を 33.1 点上回った。また、本事業により得られる年平均ハビタット得点 34.1 点を前回認証時の年平均ハビタット得点 34.7 点から引いた値は 10 以下となった。このため、本事業は要件 4 を満たすものと認める。

^{§§} 年数の経過に伴う樹林面積の拡大に伴い、目標植生（低木・草地・竹林タイプ）の面積割合よりも草地の面積割合が縮小することから、見かけ上の同タイプのハビタット得点が減少しているが、同タイプの質的な減少を示すものではない。

認証の可否と認証種別および評価ランク

以上より、本申請事業は認証要件をすべてクリアし、JHEP 認証事業に該当することを認める。保全タイプと評価ランクは以下の通りである。

認証可否 認証可

保全タイプ ハビタット代償保全および向上

評価ランク AAA

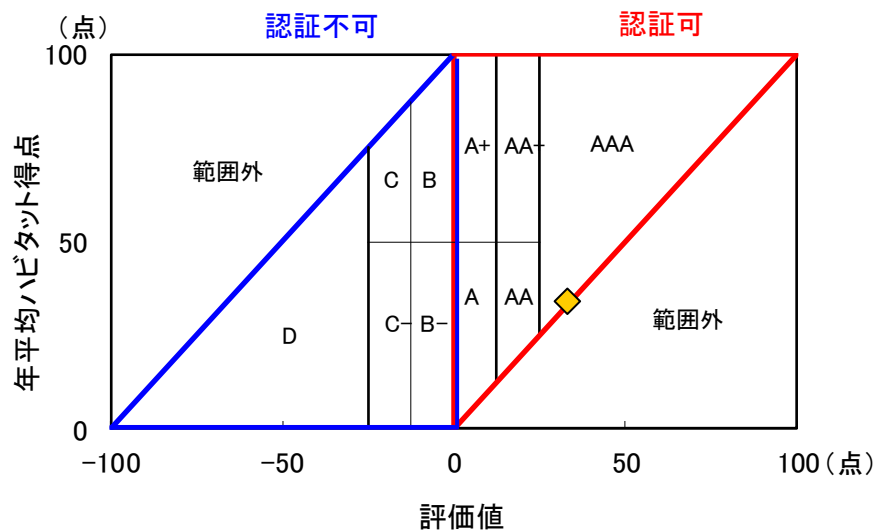


図. 本事業の評価ランク

※本事業は、横軸（評価値）が 33.1 点、縦軸（年平均ハビタット得点）が 34.1 点となる座標に位置する。このため、評価ランクは AAA に相当する。

おおはし里の杜に対する
JHEP 認証 [第 2 回更新]
審査レポート (概要版)

2026 年 9 月発行

編集 公益財団法人日本生態系協会

発行 公益財団法人日本生態系協会

〒171-0021

東京都豊島区西池袋 2-30-20 音羽ビル

電話 03-5951-0244

URL www.ecosys.or.jp/

* 禁無断転載・複製

© (公財)日本生態系協会 2026